

キリシタンをめぐる問題にいかに応答するか

佐久間 正

日本思想史学会二〇〇七年度大会のシンポジウムは、「日本思想史の問題としてのキリシタン」をテーマとし、副題として「思想と暴力」を掲げました。シンポジウムを企画した大会委員会を代表し、本シンポジウムの趣旨説明を行います。本学会の大会が長崎で開催されるのは初めてです。大会委員会では、長崎にふさわしいテーマについて考えましたが、極めて自然にキリシタンをめぐる問題を取り上げることに意見の一致を見ました。また、長崎は、「長崎学」と称される近世を中心とする郷土史・地域史研究が盛んですが、その進展に寄与するために、シンポジウムを市民に開かれたものとすることにしました。

日本思想史学会はキリシタンをめぐる問題にいかに応答するか。大会委員会において、大きな柱として一致を見たのは次の二点です。第一は、言うまでもなく、キリシタンをめぐる問題は、多様な視点から取り上げることができますが、これまで必ずしも十分な研究蓄積のない思想史の視点から考えようということです。第二は、キリシタンをめぐる問題は、直接的には、一六世紀半ばからほぼ百年間に限定される歴史的な問題として存在しますが、そこに潜む現代的意義を抉り出していこうということでした。キリスト教の伝来は、南蛮文化と総称される西欧文化を伴っていました。それらは、当時、好奇と警戒の目を持って受け止められ、その

中の技術的な要素の強いものや嗜好品の類は社会に浸透していききました。しかし、キリスト教が人々にどのよう
に受け止められていったのかは、一部の支配層の動向を除き、必ずしも明らかになっていません。言うまで
もなくキリスト教は、布教の過程において、当時の人々の生を規整していた諸々のものと対決せざるを得な
かった。その対決の内実がどのようなものであったのかを示す史料は極めて限られています。キリシタンを
めぐる問題への思想史的アプローチの第一歩として、この困難な作業を避けるわけにはいきません。それはま
た、列島においてキリスト教が、極めて短期間に教線を拡大していった理由を明らかにしていくためにも、不
可欠の作業と言えましょう。統一権力のキリシタンに対する対応は、一五八七年の「パテレン追放令」や一六
一四年の「排吉利支丹文」等によって捉えることができますが、その内容を当時の政治社会状況の中で正確に
理解することは、依然として基本的かつ重要な課題です。これらをめぐって近年新しい見解が提出されていま
すが、鎖国―禁教体制が確立する過程において、幕藩権力のキリスト教理解がいかなるものであったのかを明
らかにすることは、徳川国家の特質を考える上でも依然として重要です。

列島におけるキリスト教の布教は、ザビエルが既に見通していたように、厳しいものでした。私たちは、一
六世紀半ばからほぼ百年を経てキリシタンが壊滅したことを知っていますし、ともすればキリシタンをめぐる
問題を幕藩権力に代表される反キリシタン勢力とキリシタンとの抗争としてあたかもゲームのように捉えがち
です。しかし思想史が常に人間を問題にする限り、私たちは史料に導かれながら歴史的想像力を働かせ、歴史
の現場に立ち会う努力を怠るわけにはいきません。このような視点は、私たちが殉教をめぐる問題を考えよう
とする場合、極めて大切であると思われまます。自由な思想―信仰が、政治的に正当化された権力によって踏み
にじられる場合、思想―信仰の主体が取る行動は一樣ではありません。キリシタンの場合、それは、殉教と転
び、そして潜伏という三つの途がありました。思想を人間の主体的営為として理解する立場からすれば、この
三つはいずれも思想の終焉の姿を示しています。キリシタンをめぐる問題からアクチュアルな現代的意義を見
出そうとする時、そもそも私たちは殉教という語が、現代においてもなお死語になっていないことに慄然とせ
ざるを得ません。

また、大会委員会では、キリシタンの壊滅、鎖国―禁教体制によって確立する〈徳川の平和〉の背後にあるものに目を向けることの重要性も指摘されました。キリスト教の思想―信仰主体の抹殺という極限的な暴力を行使しつつ、その思想―信仰の内容について、理論的誤謬や反秩序性・反社会性を弾劾しつつ、それを貶める所説が様々な排耶論としてまき散らされました。〈徳川の平和〉が、キリシタンをはじめとする異宗異端の排斥の上に成り立っていたことを看過することはできません。さらに敷衍すれば、そのことは、日本の思想の〈寛容さ〉や〈和〉といった、しばしば強調される日本の伝統の内実が、いかなるものであるのかを問うことに繋がっていきます。〈寛容さ〉は他者を理解するために不可欠ですが、他者を排除することなく真の他者理解への回路を有する、鍛え抜かれた〈寛容さ〉を自らのものとするためには、〈徳川の平和〉、日本の思想の〈寛容さ〉を対象化することは極めて大切であるように思われます。

以上の問題を考える場合、比較の視点が重要となつてきます。キリシタンをめぐる問題を正しく理解しようとするならば、それを他の諸事象と切り離して捉えることはできません。大会委員会でも、バテレン追放令が言及している一向宗等をめぐる問題に目を配ることの重要性が指摘されました。本シンポジウムでは、時間的制約から、一向一揆等を主題化した報告を用意することはできませんでしたが、近年の研究で明らかにされつつある両者の信徒組織の形態や神観念等をめぐる共通性に着目しただけでも、キリシタンをめぐる問題が決して孤立した特殊な問題ではないことに気づきます。しかし同時に、両者の相違点について認識することも大切です。私はその場合、何より、キリシタンが政治権力の奪取など企図していなかった多くは非武装の人々であったことを重視したいと考えています。にもかかわらず、その信仰内容とそしておそらくはキリスト教という紐帯によって海外と繋がっていることの故に、彼らは幕藩権力によって抹殺されざるを得なかった。本シンポジウムは「思想と暴力」というサブタイトルを掲げていますが、政治的に正当化された暴力の行使は何者に対しても容赦はしないのであり、思想―信仰も例外ではありません。

最後に、キリシタンをめぐる問題と密接に関連する都市長崎にふれておきます。キリシタン大名大村純忠の町建てによって出発した長崎、私は大村―有馬―長崎を結ぶ三角形とその周辺地域を〈キリシタン・トライア

ングル」と呼ぶのですが、この三角形はキリシタン時代の中心地域でした。そしてさらにその中心であった長崎は、貿易の進展を背景にキリシタンの町として発展していきます。しかし、一六一三年の禁教令を境に暗転し、以降、長崎は反キリシタンの徳川都市としての道を歩みます。ここでは、殉教と転び、そして潜伏が、かつてはキリシタンであった住民の共同性を寸断していきました。キリシタンの町から反キリシタンの町へという長崎の転変を考える場合、私は人民支配の要諦とされる「パンとサーカス」という言葉を想起します。徳川都市長崎の場合、「パン」は貿易利潤を町人に分配する箇所銀・竈銀であり、「サーカス」は一六三四年に長崎奉行の援助により始まったとされる「諏訪神事」、今に至る（おくんち）です。おくんちに奉納される演し物は多様ですが、キリシタンをうかがわせるものは何一つありません。

本シンポジウムはかつて長崎奉行所のあった地（立山）で開催されています。徳川期には、このすぐ東には、徳川將軍の菩提寺の一つである上野寛永寺の末寺である安禪寺があり、安禪寺の後の高台には今も東照宮が鎮座しています。安禪寺のさらに東隣は絵踏の開始とほぼ同時期の開基である諏訪神社に続いています。すなわちこの地は、都市長崎の中心たる政一教コンプレックスの所在地であったのであり、さらにこれに加えて、近くには長崎奉行の援助によって長崎聖堂が設立されました。聖堂初代祭酒の向井元升は、転びバテレン沢野忠庵（日本イエズス会の中心人物であったクリストファン・フェレイラ）の天文地理に関する陳述を紹介した『乾坤弁説』を著すとともに、キリスト教を激越に批判した『知恥篇』の著者でもあります。聖堂を加えれば、この一帯はまさに徳川都市長崎の政一教一学コンプレックスであったと言つてよいでしょう。こうして、殉教と転び、そして潜伏が複雑に交錯する中で、キリシタンの町は破壊され意識的に忘却されていったのです。その一方、この複合体を新たな中心として徳川都市長崎が形成されるとともに、今に続く〈伝統〉が創造され、徳川日本にあつて例外的な異国情緒豊かな町というイメージが再生産されていきました。

私たちが郷土史・地域史の研究において埋もれた史実を掘り起こし、歴史の真実を描こうとするとき、表面のみの歴史ではなく、深層あるいは棄却された歴史に目を向け、抑圧され沈黙を余儀なくさせられた情念に思いをいたすことは不可欠です。長崎においてキリシタンを取り上げるといふことは、そのような営為であると

思います。本シンポジウムが、「日本思想史の問題としてのキリシタン」をめぐる、従来よりさらに進んだ理解を示す場になることを期待して、趣旨説明を終わります。

(長崎大学教授)